

まちのアルバム

認知症になっても暮らしやすいまちへ

市では、「認知症になっても暮らしやすいまちをみんなで創っていこう!」という思いを共有し、認知症啓発のシンボルカラーであるオレンジ色の花を咲かせる“オレンジガーデニングプロジェクト”に参加しています。

4月にマリーゴールドの種をまき、地域の皆さんのご協力のもと苗を育て、6月の「カフェおこしやす」で配布しました。

苗を受け取ったデイサービスセンターほほえみ(吉地)では、利用者の皆さんが花壇に植え、大切に育てておられます。鮮やかに咲くマリーゴールドをみて、にっこり笑顔。

今年育てた花から種をとり、来年も苗のバトンをつなぎます。

この活動により、認知症への理解が広まり、野洲のまちがオレンジの花で彩られると素敵ですね。

▼7月29日 デイサービスセンターほほえみ



歴史の小窓

—学芸員のメッセージ—

(216)

歴史民俗博物館 ☎587-4410、Fax587-4413

近江天保一揆 —百姓たちの戦い—

天保13(1842)年、江戸幕府により、近江国で大規模な検地がはじまります。検地とは田畑の面積や収穫量を定める調査で、当時幕府は、老中水野忠邦が「天保の改革」を進め、年貢(税)を増やすために全国で検地を行っていました。

同年6月、野洲郡でも幕府の検地がはじまりました。野洲郡の庄屋や百姓たちは、三上村(野洲市三上)の庄屋・土川平兵衛を指導者として一揆を起こします。10月16日、三上村に滞在中の検地役人を大勢の百姓らがとりかこみ、「検地十万日の日延べ」の証文を勝ちとります。これは検地を西暦2116年まで延期するという約束であり、事実上、検地を断念させるものでした。

検地の断念は、江戸幕府に力がなくなってきたこ

とを示すものでした。幕府は威信をとり戻すため、一揆の指導者たちを徹底的に処罰します。土川平兵衛はじめ指導者たち11人が幕府の役人に捕らえられ、拷問や病気などで帰らぬ人となりました。野洲市の市民は、土川平兵衛ら一揆の指導者を「天保義民」としてたたえています。



ミニ特集展示「近江天保一揆—180年記念—」では、この近江天保一揆に関する資料を展示しています。

(市史専門調査員 川原吉貴)

土川平兵衛像
(野洲市立三上小学校)

■ミニ特集展示「近江天保一揆—180年記念—」

開催中～10月2日(日)まで

※9月の休館日:月曜日(19日は除く)、20日(火)、27日(火)～29日(木)

※市民は入館無料

(運転免許証やげんきカードなどをご提示ください。)

※市ホームページ等で事前に開館状況をご確認の上、ご来館ください。